産業TREND

アートで行動変容訴え

本稿ではこれまでの美食地政学の議論を総括するとともに、持続可能なフードシステムに向かうためのアートを用いた行動変容を促す新しい取り組みを紹介し、今後の展望を述べたい。

東京都市大学環境学部
環境経営システム学科教授
古川 柳蔵

ふるかわ・りゅうぞう　72年（昭47）東京都生まれ。博士（学術）。東京都市大学環境学部環境経営システム学科教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然に学ぶものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。

未利用資源を活用する 美食地政学 パート2 ▷12

廃材を絵の具に100年後描く

制約の中の豊かさ表現

2022年1月から、美食地政学という新しい考え方に基づき、未利用資源を活用し気候変動に適応した持続可能なフードシステムに変革するために考えなければならないことを論じてきた。地球環境は激変しており、今後の日本の食料確保は危機的状況にある。日本は50年にカーボンニュートラル（温室効果ガス排出量実質ゼロ）の社会を目指している。21年10月に地球温暖化対策計画が閣議決定された。30年度において温室効果ガスの13年度比46%削減を目指し、さらに50%の高みに向けて挑戦を続けるというものである。

このために、家庭部門の温室効果ガスの排出を66%削減する目標が設定された。対策が進んでいないからである。暮らし方そのものを変えなければならない段階にきているが、個人の暮らし方を変えることにも、社会全体のシステムを変えることにも時間がかかる。カーボンニュートラル変革を阻害している面がある。人は今の延長線上のライフスタイルを好み、気候変動問題に対しては置き換えのソリューションで良しとしてしまう。例えば、化石燃料から自然資源への転換である。一見、十分のように思えるが、そもそも暮らし方が変わらなければ効果が少ない。制約の中の豊かさという新価値を見いだす思考法が必要である。

これをバックキャスト思考と呼ぶ。しかし、思考法の切り替えは容易でない。将来、持続可能なフードシステムには、新価値を生み出し、新ビジネスやグリーンジョブを創出しなければ、利便性が奪われたままの豊かさが少ない社会になるだけだ。美食地政学のプロジェクトで焦点を当てているゴールはグリーンジョブマーケットの創出である。さらに、地域の高校生や地域住民がウェルビーイング（心身の幸福）を再定義し、何を求めて働きがいのあるディーセントワークを手に入れるかだ。自分を見つめ直し、行動変容を起こすことが重要である。

◎　◎　◎

これまで何か芸術作品に出合い、考え方や行動を変えた経験はないだろうか。人を幸せにするためにアーティストは時間をかけて芸術作品を生み出している。我々の研究グループは、理性だけではなく感性を用いて人の行動を持続可能なものに向かわせることができないか検討を開始した。

アーティストで実現のための新技術があったとしてもその普及には時間がかかる。急がねばならない。

食の分野では、どのような価値観に変えれば持続可能性が高まるのか、おおよそ予想がつく。持続可能な社会であった戦前の暮らし方が記憶にあるからである。90歳前後の戦前の暮らしの経験者は、例えば「人に合わせるのではなく自然に合わせて暮らす」「資源管理ができない大量生産・大量消費ではなく少量多品種を楽しみながら暮らす」「利便性を求めるのではなく手をかけることを楽しむ」「欲を満たす豊かさではなく制約の中の豊かさに満足する」などである。しかし、利便性から目を背けることは難しい。週末だけ不便なキャンプを楽しむことはできるが、平日は利便性を高める仕事をしてしまう。

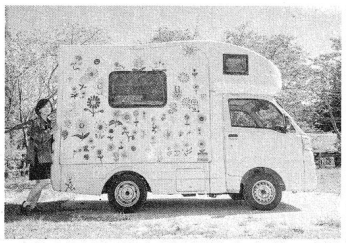
思考の仕方がライフスタイル変革を阻害している面がある。人は今の延長線上のライフスタイルを好み、気候変動問題に対しては置き換えのソリューションで良しとしてしまう。例えば、化石燃料から自然資源への転換である。一見、十分のように思えるが、そもそも暮らし方が変わらなければ効果が少ない。制約の中の豊かさという新価値を見いだす思考法が必要である。

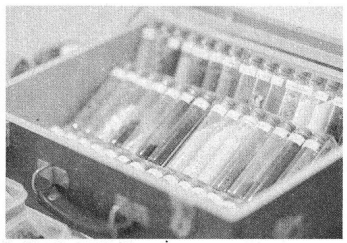
これをバックキャスト思考と呼ぶ。しかし、思考法の切り替えは容易でない。将来、持続可能なフードシステムには、新価値を生み出し、新ビジネスやグリーンジョブを創出しなければ、利便性が奪われたままの豊かさが少ない社会になるだけだ。美食地政学のプロジェクトで焦点を当てているゴールはグリーンジョブマーケットの創出である。さらに、地域の高校生や地域住民がウェルビーイング（心身の幸福）を再定義し、何を求めて働きがいのあるディーセントワークを手に入れるかだ。自分を見つめ直し、行動変容を起こすことが重要である。

◎　◎　◎

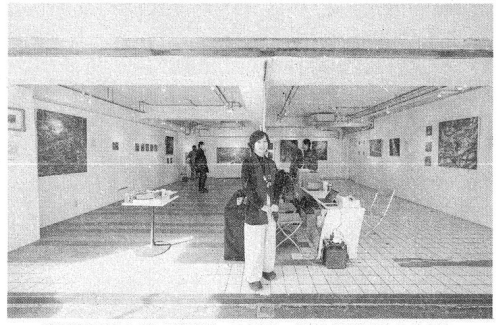
これまで何か芸術作品に出合い、考え方や行動を変えた経験はないだろうか。人を幸せにするためにアーティストは時間をかけて芸術作品を生み出している。我々の研究グループは、理性だけではなく感性を用いて人の行動を持続可能なものに向かわせることができないか検討を開始した。

アーティストで





㊧全国を回りながら訪れた土地の廃材を利用し100年後の未来を描く㊨廃材から絵の具をつくる㊦展示会来場者に作品の背景にあるストーリーを伝える田村氏㊨



㊤100年後も続く鵜飼いの景色（田村綾海氏の作品）
㊦東京・原宿で開かれた「廃材から描く展」

地域の物語伝える新たな役割

■鑑賞者が未来考えるきっかけに

環境問題、見えてくるもの変化

東京都市大学
総合研究所特別研究員
田村 綾海氏

アーティストであり、東京都市大学総合研究所特別研究員の田村綾海氏に、廃材アートについて話を聞いた。全国を回りながら訪れた土地で取れる廃材を再利用して「観る人に未来を考えてもらう作品」を制作している。

―なぜ廃材を絵の具にして絵を描いているのですか。

「廃材に着目したのは、命の大切さなど伝えたい思いをより強く伝えるために素材の力を借りようと考えたからです。山に石を取りに行き、絵の具を作り、私自身が納得して作品を作れるようになりました。絵でしか表現できない未来の絵を描いています。また、多くの人に絵を見ていただくためには社会を良くしなければならないと考えました。環境問題がその一つでした。沖縄のサンゴが白骨化しているのを知り、それを取り除き絵の具に利用することで新しいサンゴが生えてくるのではと考えたのです。しかし、私一人が絵の具にしたところで問題は解決しません。自分が地域で見聞きしたことを多くの人に伝えることが大事です」

―活動を通して分かったことは。

「鵜（う）飼いの絵を描いた時に鵜匠（うしょう）と鵜の信頼関係がすごいことに気付きました。岐阜県の長良川の鵜匠によると、通常、鵜は1ケタの年数しか生きられませんが、水をきれいにして人がしっかりと育てると30年は生きられることを知りました。鵜匠は一羽一羽の体調まで分かるそうです。また、九州・有明海のヘドロで絵が描けますかと聞かれたことがあります。ヘドロには酸素が少なく、生き物が住みにくいのですが、一見、普通の海に見えます。ヘドロが問題であることに気付くには地域の有明海との距離が近くなければなりません。私は現地の人の言葉を聞き、見えるものが変わったと思います」

―今後の取り組みは。

「環境問題に対して自分ができる小さいことが本当に解決につながることなのか分からないのに行動できる人がいます。変わり果てた自然を見て、行動せずにはいられないのです。地域で出会った（環境を）少しでも良くしようと行動する人の心は美しいと思いました。鵜飼いの絵を見てその地まで行ってみた人、有明海の絵を見て海苔（のり）を買ってくれた人がいます。絵を見た人が作品を生み出すプロセスに感動してくれています。絵の具の作り方だけではなく、その地域の環境がどうなっているのか見てくれています。絵を描く人の生き方まで評価されます。これからもいろいろな素材を使ってたくさんの作品を作りたいです。自分の作品で人々の幸せにつながれば良いと思います」　（聞き手・古川教授）

あり東京都市大学総合研究所特別研究員の田村綾海氏は、キャンピングカーで全国を回りながら訪れた土地で取れる廃材を再利用して「観る人に未来を考えてもらう作品」を制作している。廃材を絵の具にして、その地域の100年後の世界を表現している。23年12月2日から10日まで東京・原宿のデザインフェスタギャラリーで「廃材から描く展」を開催した。鑑賞者は絵を見ながらその絵の背景や絵になるまでのストーリーを聞くことができる。

絵画そのものに対して「廃材とは思えないクオリティー」「迫力があった」などの感想を持つとともに、展示会に満足した理由として「素材の背景を知ることが大事だと思った」「未来に作品が残ってほしいと思った」「アートの新しい役割を見つけた」「社会や環境の課題について目を向けようと思った」などが挙げられた。

鑑賞者は作品に込められているストーリーを理解しようとしている。ストーリーとともに鑑賞するというナラティブ・アプローチが、鑑賞者に地域の課題を再認識させ、アートの新しい効果を見いだせている。100年後の未来を描こうとしている点については「自分なりの100年後の未来が想像できた」人が多く、さらに「自分が想像していた未来とは異なり、新しい未来を想像した」人がほとんどであった。「100年後の世界の音が聞こえるようだった」人が3割を超え、五感を用いて新しい未来を創造するきっかけとなったようだ。

◎　◎　◎

これまで2年間にわたってJSTの共創の場形成プログラムの「美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点」（32年度まで継続予定）における考え方やそれにかかわる人々の思いを伝えてきた。この一人ひとりの活動が波及し、ボトムアップ型のライフスタイル変革が各地で進み、次世代の子どもたちに新しい価値観が引き継がれていくことを願っている。

（おわり）